速　報

長岡京跡宮第549次調査発表資料

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

１．はじめに

今年度前半期に実施した発掘調査において、南北方向に並ぶ10基の大型の柱穴列を検出しました。当初、何らかの施設を区画するための一本柱塀であると想定していましたが、10月以降の調査で、この柱穴の北側であらたに柱穴を確認し、長大な南北棟の建物（ＳＢ450）になることが明らかになりました。

２．掘立柱建物ＳＢ450の概要

掘立柱建物ＳＢ450は、桁行二十間（55.6m）、梁行三間(7.6m)で、柱穴は、平面形が隅丸方形を呈し、柱間の長さが1.3～1.8m、深さは1.25～1.9m以上を測ります。柱の直径を確認できたものは少ないですが、断面の観察から45㎝前後と想定できます。柱間の距離は南北約2.7m（９尺)、東西約2.5m（8.5尺）を基準としています。

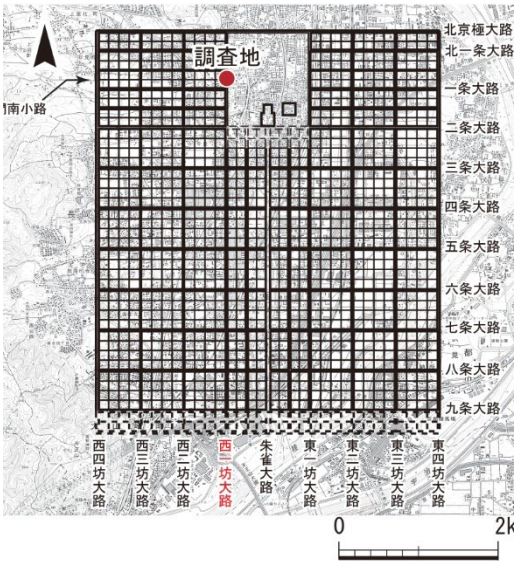
３．掘立柱建物ＳＢ450の類例等について

掘立柱建物ＳＢ450と同様の長大な南北棟建物を宮内で検出した例は、平城宮の離宮とされる推定「西池宮」や紫香楽宮朝堂区画の建物、馬を飼った馬寮の建物などの例があります。朝堂院区画内の建物群や離宮の場合多くは、東西方向の正殿に対する南北方向の脇殿と位置付けられていますが、ＳＢ450のような梁行三間の事例は多くはありません。

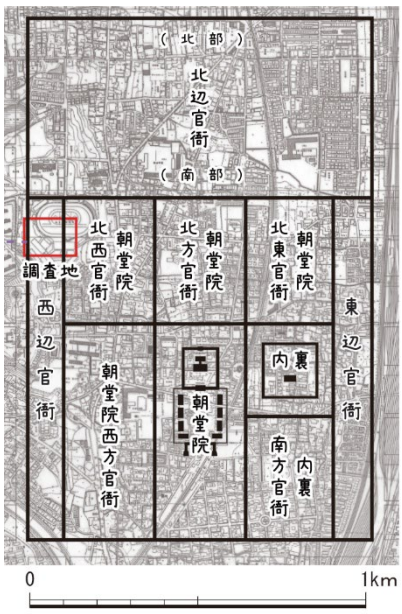
また、身舎の梁行が三間の例としては、長岡宮内裏正殿をはじめとして、宮内の正殿級の建物の事例も多いのですが、これらの建物の大半は東西棟建物で、身舎の桁行も七～九間のものが多いのが特徴です。柱穴規模は、一辺1.2～1.6mのものが多く、ＳＢ450の柱穴規模は、これらと比べても遜色がありません。柱の深さは長岡宮最大の掘立柱建物である内裏正殿が0.7～1.0mであるのに対して、1.25～1.9m以上と、かなり深いもので、軒高の建物の存在が予想されます。

４．まとめ

今回の調査で検出した掘立柱建物ＳＢ450は、柱穴規模が長岡京内裏正殿や長岡京東院正殿と同規模で、長岡宮内のこれまでの調査では最長の建物となることが判明しました。こうした大型建物の存在が明らかになったことは、長岡宮の西辺官衙や宮全体の構造を解明するうえできわめて重要な調査成果です。

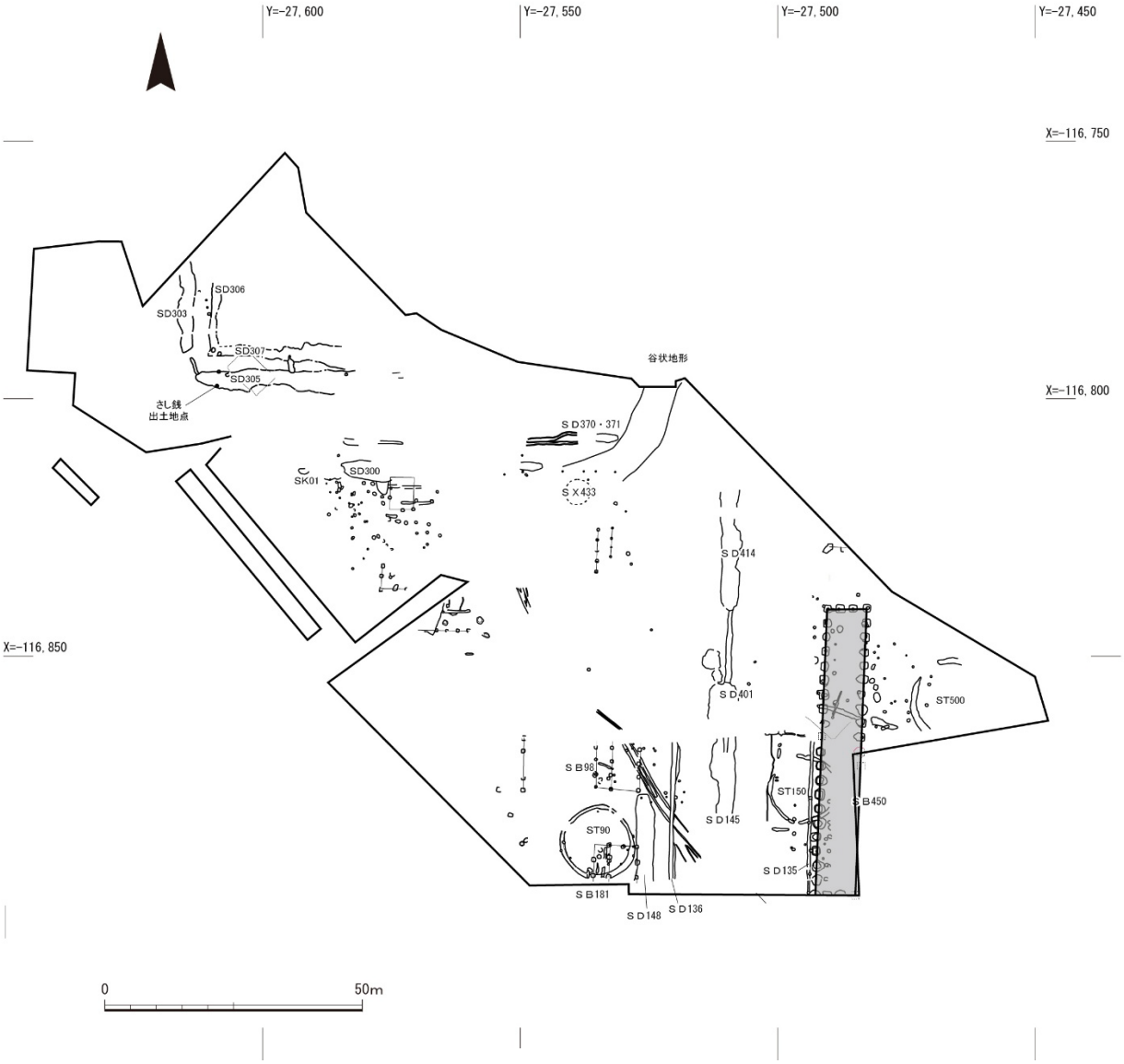


第１図　条坊位置図

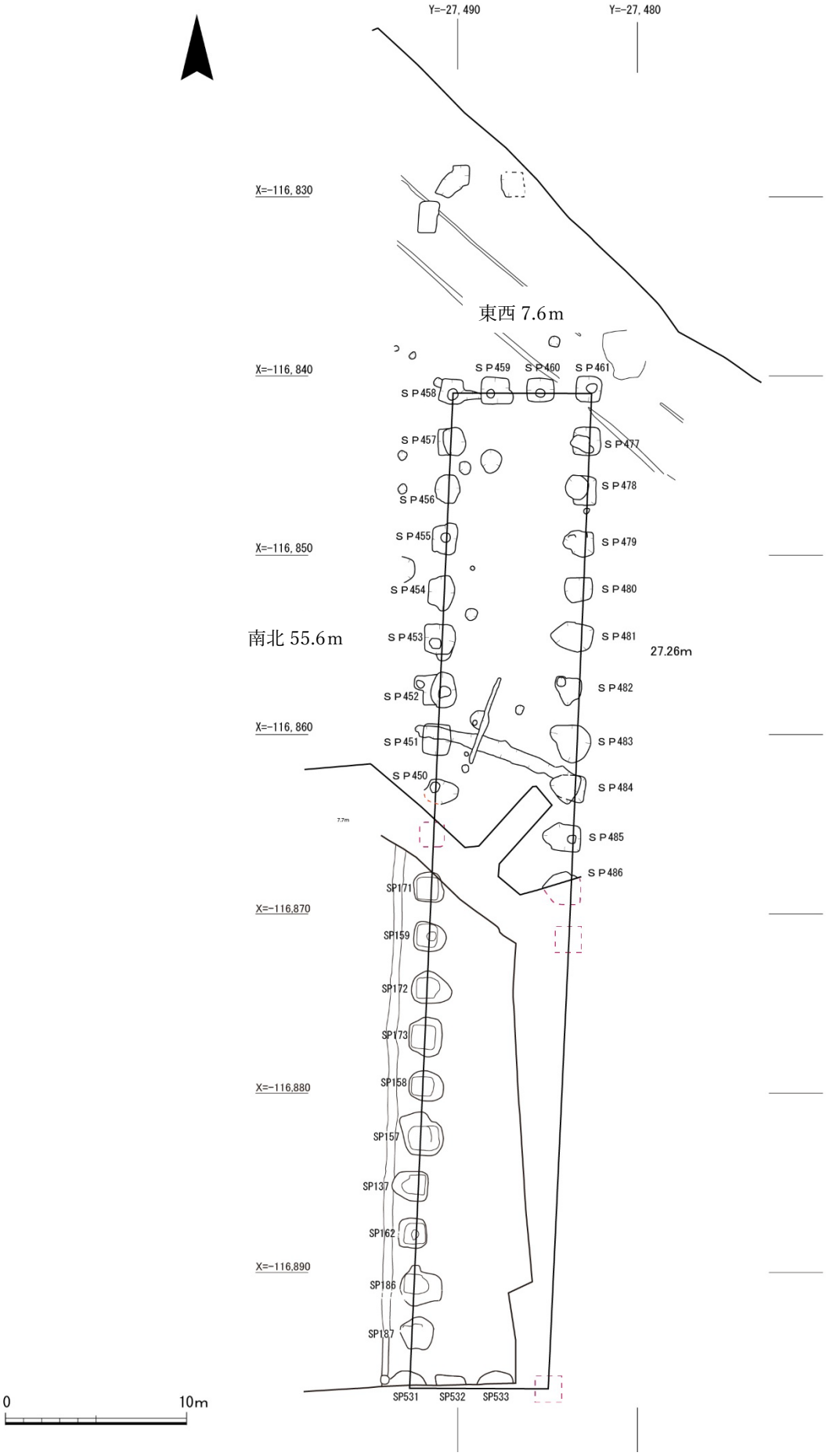


第２図　長岡宮官衙配置割付図

（向日市教育委員会　1982）



第３図　調査地全体図



第４図　SB450 遺構平面図

写真１　掘立柱建物 SB450 全景（上が東）

写真２　掘立柱建物 SB450 北半部分（北から）

写真３　掘立柱建物 SB450 北半部分（北東から）

写真４　掘立柱建物 SB450 柱穴 SP483 全景（北東から）